

我國現時の物價騰貴と通貨との關係

沙 見 三 郎

一 序 論

吾人の論せんとするは、世界戦争開始以來の我國物價騰貴が通貨就中日銀兌換銀行券と如何なる關係を有するやの點なり。

此問題を扱ふに當り注意すべきの事項二あり。第一は本問題の本質が *Sollen* にあらずして *Sein* なる事これなり。近頃通貨偏重論を唱ふる學者を見ては直に分配政策論者社會政策學者として敬意を表し、貨物重視論者に對しては生産政策資本主義の御用學者なる冷語を下すの傾向あり。されど本問題は政策の前提たるべき根本問題にして、結論たる政策よりして本質論たる本論を演繹するが如きは論理の顛倒たるの譏を免れず。第二は本問題の實益の大なる事なり。其答案の如何に依りて或は暴利取締令を強行すべし、或は兌換券收縮を斷行すべし。故に其本質を究むる態度や徹底的ならざるべからず。傀儡を捉へて之を攻むるも畢竟無用の業のみ *Wire-puller* に迄推し及ぼさざるべからず。

凡そ物價は貨幣と貨物との交換比なり。従つて物價の變動を説明するに當り、其主要原因を貨物に求めんとする説と相並びて貨幣側に求めんとするの論存す。而して此點に關しては學界未だ

1) Fisher, *Purchasing Power of Money*, Preface to the first edition.

2) 福田博士「何を調節する」(太陽第二十四卷第十二號八頁)

定説を見ざるなり。

一般問題としての物價問題は暫く措き、我國現時の物價騰貴に關して之を見るに貨幣數量説を唱ふる論者、貨物重視論を主張するの學者相半ばし、甲論乙駁歸着する所を知らざるなり。遠くは小川博士の論文最近に於ては大藏省理財局藤田博士山崎博士河津博士等の有益なる研究續々發表せられつゝあり。唯此等の諸論文は——二三の例外を除きては——いづれも結論のみ明瞭に示され前提たるべき數字的根據の蒐集に關しては一舉手一投足の勞をも惜まれたるが如し。これ此重大なる學術的論争が動もすれば水掛論に終らんとする傾ある所以也。全部の骨子を單純なる數字の羅列に止むる本論文が學界に多少なりとも寄與する所ありとせば蓋し此意味に於てなるべし。

二 本 論

第一、余の研究方法

我國現時の物價騰貴は其重大原因を通貨の側に認むべきや、將た貨物の側に求むべきやを究むるを本論の趣旨とす、從て余は戰時異常の際に於ける此具體現象を統計的且つ歸納的に論究せんとす。換言すれば余の研究方法は具體的に、特別的に、而も歸納的なりとす。

一、何をか具體的と云ふ。我國現時の物價騰貴と通貨との關係を取扱はんとするなり。Nicholson³⁾ Edgeworth⁴⁾等は英國物價騰貴の原因を委細論じたるも、そは英國のことに屬す。我國のことにあらざるなり。我國には我國特別の經濟狀態ありとす、余は我國現時の物價騰貴と通貨との關係を

3) 兌換券と物價との關係を論ず(經濟論叢第三卷第三號)
4) 兌換論と物價騰貴との關係を論ず(經濟論叢第三卷第三號)
5) 兌換論と物價騰貴との關係を論ず(經濟論叢第三卷第三號)
6) 物價騰貴と通貨膨脹との關係(日本評論第九十號)

研究するに先ち、我國平時のそれを明にせんとし、通貨の月末流通現在高、日銀兌換券の毎月平均發行高、及び日銀調東京大阪物價指數につきて明治四十二年乃至大正二年の最近五年間の毎月平均を採り次の如き季節的變動 (Seasonal Fluctuation) を得たり。

月	通貨月末流通現在高			日銀兌換券毎月平均發行高			東京物價指數			大阪物價指數		
	自然數	對數	前月比較	自然數	對數	前月比較	自然數	對數	前月比較	自然數	對數	前月比較
一月	531,700	5.727	△ 10.8%	3,500	8.549	△ 3.2%	111.0	2.045	△ 1.2%	111.0	2.045	△ 1.7%
二月	532,900	5.730	△ 1.1%	3,500	8.549	△ 0.0%	111.0	2.045	△ 0.0%	111.0	2.045	△ 0.0%
三月	531,700	5.727	△ 1.1%	3,500	8.549	△ 0.0%	111.0	2.045	△ 0.0%	111.0	2.045	△ 0.0%
四月	531,700	5.727	△ 0.0%	3,500	8.549	△ 0.0%	111.0	2.045	△ 0.0%	111.0	2.045	△ 0.0%
五月	531,700	5.727	△ 0.0%	3,500	8.549	△ 0.0%	111.0	2.045	△ 0.0%	111.0	2.045	△ 0.0%
六月	531,700	5.727	△ 0.0%	3,500	8.549	△ 0.0%	111.0	2.045	△ 0.0%	111.0	2.045	△ 0.0%
七月	531,700	5.727	△ 0.0%	3,500	8.549	△ 0.0%	111.0	2.045	△ 0.0%	111.0	2.045	△ 0.0%
八月	531,700	5.727	△ 0.0%	3,500	8.549	△ 0.0%	111.0	2.045	△ 0.0%	111.0	2.045	△ 0.0%
九月	531,700	5.727	△ 0.0%	3,500	8.549	△ 0.0%	111.0	2.045	△ 0.0%	111.0	2.045	△ 0.0%
十月	531,700	5.727	△ 0.0%	3,500	8.549	△ 0.0%	111.0	2.045	△ 0.0%	111.0	2.045	△ 0.0%
十一月	531,700	5.727	△ 0.0%	3,500	8.549	△ 0.0%	111.0	2.045	△ 0.0%	111.0	2.045	△ 0.0%
十二月	531,700	5.727	△ 0.0%	3,500	8.549	△ 0.0%	111.0	2.045	△ 0.0%	111.0	2.045	△ 0.0%

此表に依て之を觀るに我國平時の經濟事情として通貨物價共に季節的變動に一定の規律の存するを知るなり。即ち通貨は年末に膨脹し其後漸次收縮して四月に至りて谷に達し、又膨脹を繰返して十二月に於ては波動の山に達するなり。日銀兌換券も大體これと類するも只谷が五月なるが重大なる差異のみ、而して其波動たるや通貨兌換券雙方共に比較的顯著なり。反之物價の季節的變動は極めて微々たり。而して上半期より下半期に入りて騰貴の傾向を示し東京は一月が谷にし

て十月が山大阪は二月が谷にして十二月が山なり。而して大阪は東京よりも物價大體に高く而して其變動の幅も大なり。余は此平時の季節的變動より出發して戰時の變動を見んとす。

二、何をか特別的と云ふ。余の研究せんとするは戰時の状態なればなり。平時の状態にあらざるなり。平時に於ては other things remaining equal なる貨幣數量説の金言を最後の避難所として安全第一の舊説を墨守するも可ならん。現時は暴風吹きまくれる戰時なり。一波が萬波を起せる過渡の時なり。¹⁰⁾貨物の事情を無視して議論を進むるが如きは根本的の誤なり。

三、最後に歸納的と言ふ。余は先づ物價騰貴なる經濟現象を統計材料に基き忠實に「カメラ」に寫さん事を期したり。この目的の爲に自ら數字表を作製したり。次に自然の精神を傳ふる巧妙なる畫工たらん事を期したり。これが必要上第一に通貨の意義を限定し次に物價指數の分類を作製せり。かの通貨を以て硬貨に限るは狭きに失すると共に預金通貨を包含するの廣きに過ぐるを思ひ、中庸をとり、硬貨(月末發行高より鑄潰高、兌換準備高及海外純輸出高を差引きたる數字を擧げたり)小額紙幣(月末發行高を月末流通高と看做したり)日本銀行兌換券(月末發行高を月末流通高と看做したり)を以て通貨流通總額となせるなり。されどかくて得たる通貨流通總額の數字を直に物價指數と比較する時は種々の不都合を生ずるを免れず。硬貨のみにつきて見るも私人の鎔解密藏密輸出せる額を正確なる數字にて示すは全然不可能なるを以て余の所謂硬貨流通總額と實際市場に現はれたる硬貨總額とは其間大差存するなり。

又小額紙幣并に硬貨は月末數字のみ明にして毎月平均數字を得るに由なく、従つて毎月平均數

10) Fisher, *ibid.*, Chap. VIII, § 3.

たる日銀物價指數(日銀物價指數は Economist, Bradstreet のそれと異り上旬中旬下旬の指數の平均を以て示さる)と比較するに便ならず。只日銀兌換券のみは明治四十年以來逐月平均數字の據るべきものあり。且つ通貨膨脹として主として論ぜらるゝが日銀兌換券の増發なるに鑑み、特に日銀兌換券毎月平均發行高に一項を割き通貨月末流通現在高と同様の取扱をなせり。最後の物價指數の分類は大體 Economist のそれに則りたり。これ日銀物價指數が漫然たる五十六品目の羅列に過ぎざるを以てなり。

余は貨物それ自身の事情を窺ひ次に問題を貨物と貨幣との關係に移し以て本問題を明確に解決せん事を期す

第二、貨物側の事情に於て物價騰貴よりも價格騰貴の現象著し

一、世人は無條件に物價騰貴と云ふ。余は慎重に其用語を吟味せざるべからず。もし物價を以て general prices の譯語なりとせば、余は更に particular prices を譯して價格とし、我國現時の所謂物價騰貴なるものは特殊貨物の價格騰貴先づ起り一般物價騰貴は其副の産物に過ぎざるを明にせんとす。

一般物價騰貴は貨幣の購買力の減少なり。貨幣と貨物との交換比に於て貨物の水平線一齊に騰貴せるなり。極めて稀なる場合を除き其原因を貨幣に求むるが自然なり。特殊貨物の價格騰貴は個々の貨物の特殊の原因に基く價格の騰貴なり。貨幣と貨物との交換比に於て或る特殊の貨物のみが水平線を突破して山を作るなり、谷を掘るなり。貨物側に其原因を求めざるべからざるや明けし。

11) 福田博士本邦通貨指數の算定に就て飯島幡司君に教を乞ふ。(國民經濟雜誌第二十五卷第二號三一—三十一頁)

炭増(原料大豆米麥澱燃料桶勞銀運搬費騰貴)(一八七―六五九)

第三 纖維工業品

絹荒地(織元減少、生絲高、染料品、思惑買占、運賃及勞銀包裝費の騰貴)(一六―二四二)

眞綿(新物粗悪、原綿騰貴、燃料高、生絲高、機業家の買進、運賃及勞銀の騰貴)(一〇九―二二七)

線綿(内地及支那産不作、銀塊暴騰、對支爲替關係、綿糸暴騰、船腹不足、運賃戰爭保險率勞銀及包裝費騰貴)(二七―四一八)

綿絲(歐洲戰亂の爲戰時保險率暴騰、藥品及染料騰貴、原綿作柄不良、銀塊暴騰、交戰國へ綿織布輸出激増及運賃騰貴、織物界需要増加、勞銀及包裝費の騰貴)(二八―四三四)

白木綿(綿絲の騰貴、輸出好況)(一〇四―二六九)

金巾(綿絲暴騰、輸出好況)(一一―三五二)

毛斯綸(操業短縮、需要増加)(九四―二六九)

第四 金屬類

洋鐵(戰亂の爲入品杜絶、船腹不足、戰時保險率及運賃昂騰、英米の輸出禁止、内地に於ける需要の増加)(六九―五一三)

第五 雜品

洋釘(輸入減少、原料騰貴、需要旺盛、燃料騰貴、運賃及勞銀騰貴)(八二―三九〇)

石炭(外炭輸入杜絶、出炭減退、貯炭減少、船腹不足、運賃暴騰、需要増加、積雪害、鐵道輸送澁滞、撫順炭坑再爆發、勞銀其他器具の騰貴)(二四―四〇四)

油(原料不足、輸出増加、製油家の休業、銀塊高、輸送力缺乏、容器高、勞銀の騰貴)(二〇―二五九)

木炭(生産不足、勞銀騰貴、貨車船舶不足)(九四―二七七)

セメント(輸出増加、企業勃興、需要増加)(八五―一九七)

藍(輸入減少、原料騰貴、需要増加、運賃及戰時保險率騰貴、勞銀其他包裝費騰貴)(一四四―四五四)

硝子板(戰亂の爲輸入杜絶、原料の不足、燃料及運費、勞銀包裝費の騰貴、船腹不足、戰時保險率騰貴)(二二四―三九八)
洋紙、輸入品の杜絶、輸出の旺盛、原料「パルプ」藥品運賃及戰時并保險率の騰貴(硫磺石炭運賃勞銀等の騰貴)(二〇七―五三三)
生漆、代用品として需要増加、生産不足(一一三―二五四)

辨寸(諸原料騰貴、輸出増加)(九八―二五六)

更に休戦(大正七年十一月)後の變動を見るに十月に至る迄上騰の勢を續けし東京物價指數は十一月に及び總平均却つて下落せり個々の貨物につきて見るに十一月東京物價指數は十月のそれに比し下落二十二騰貴十五保合十九にして其變動頗る區々たり。

三、以上論する所に依て之を觀れば戰爭開始以來最初二箇年は特殊貨物の價格騰貴に過ぎざりしなり、一般物價騰貴の狀況を呈したるは最近の事實なりとす。而して各貨物の價格騰貴にはそれぞれ特殊の事情存したりしが、最近にては「戰亂の爲めの需要供給關係の變動」なる共通因子に結ばれて上向の調子となりしなり。買占賣惜等の心理的方面の閑却すべからざるは言を俟たず。

世人動もすれば最近の狀況を見て一概に通貨膨脹に基く物價騰貴と云ふ。されど價格騰貴先づ起り、それが集大成して物價騰貴を呈したる極めて稀なる一事例たる事は上述の説明に依りて明ならん。貨幣の購買力の減退は余も亦之を認む。しかも余は貨物側に大原因を求めんとするなり。

第三 通貨膨脹と物價騰貴との關係に於て先づ原因は貨物側に求めざるべからず

一、以上専ら貨物それ自身に物價騰貴の原因を求めたり。更に一轉して物價騰貴と通貨膨脹との關係を明にせんとす。本研究の材料は集めて第三表に在り

第三表

時事問題 我國現時の物價騰貴と通貨との關係

更に進んで最近の具體的變動に就て考へん。大別して戦前と戦争開始後とし戦争開始後を細別して二期とす。

二、戦前に在りては日本銀行兌換券は平均數大正元年の三四七、四八〇、六八二円より三・七%減じて大正二年三三四、八五九、九四八円となり更に更に五・八%收縮して大正三年の三二五、五三六、五九九円となれり。東京物價指數は大正元年の平均數一三二・〇七より〇・二%増して大正二年の二三二、三四となり次に四・六%減じて大正三年の一二六、三一となれり。同様に大阪物價指數も一三九、二〇より〇・五%増して一三九、八五、四・七%減じて大正三年の一二四、〇二となれり。即ち雙方共下向の傾向を呈し其變動の幅たるや平時のそれと大差無きなり。

三、大正三年より大正五年迄を開戦後第一期とす。

先づ平均數につきて見ん。大正三年より四年にかけて東京物價指數は一二六・三二より一・二%増加して一二七・八四、大阪物價指數は一三四・〇二より〇・六%増して一三四・八五となれるに拘らず、日銀兌換券は三一五、五三六、五九九円より一・四%減じて三〇七、八九三、二二三円となれり。而して四年より五年にかけては日銀兌換券も(三〇七、八九三、二二三円より二五・三%増にて三八五、八〇六、七九一円)東京物價指數も(一二七・八四に二一・二%増にて一五四・九四)大阪物價指數も(一二三四、八五に一八・九%増にて一六〇・四五)一齊に増せり。

次に變動の幅即ち最高と最低との差異の比を調べん。大正四年に於ては東京物價指數は一七・八%(最低一二〇・六四最高一四二・一一)大阪物價は一八・四%(最低一二七・九一最高一五一・三

九) 實に近年未曾有の變動の幅なり。これを平時の一・八%乃至二・一%に比すれば約十倍の變動なりと云ふべし。然るに通貨總計は二六・一% (最低四七・五、四八四、九五三、最高五九九、五七八、七三四) 兌換券銀行券は二八・二% (最低二八一、一一八、七五一、最高三六〇、〇三五、一九一) にして平時より多少其幅大なるのみ。大正五年に入り物價騰貴は益々其勢を増し (東京は最低一四五・六六最高一七三・一一の一八・九%) (大阪は一九・五%にして最低一五〇・一六最高一七九・五〇) 通貨膨脹 (最低五二・九、四〇六、六四六、最高七八二、六二四、四八一) の四七・八% 兌換券増發 (最低三二・八、一二七、六〇三、最高五〇九、二〇五、二四二) の五五・二% (も悉々本物となれりとす。¹⁷⁾ 即ち大正元年より大正三年にかけて物價下落通貨收縮の傾向ありしも大正三年八月戰爭開始以來追々其勢を加へたり。而して物價は大正四年の始より少々騰貴し始めしが春より夏にかけては保合の姿にて止まり秋に入り殊に十月より急に騰貴し日々其勢を強め五年三月に新記録を作り十二月には又其記録を破り以後其形勢を持續して現時に及びしなり。然るに通貨は太正四年十二月より五年一月にかけ膨脹せしもこれ季節的變化より見て何等異とするに足らざるなり。故に眞の膨脹は大正五年より始まり其勢を持續して今日に及べり。

故に物價騰貴は四年十月頃より始まれるに兌換券の増發は主として五年に入りての後なるを知る。果して然らば第一期に於て通貨の膨脹は物價騰貴の原因と云ふべからず、寧ろ物價騰貴の結果と云ふべきなり。

四、次に大正五年以後の期間たる第二期に移らん。

平均數につきて見るも大正五年より六年にかけ兌換券は四〇・六% (三八五、八〇六、七九一より五四二、四四九、一三二画)を増し東京物價指數は二六・七% (一五四・九四より一九六・三七)大阪物價指數は二八・四% (一六〇・四五より二〇六・〇二)をいづれも増せり。

更に變動の幅即ち最高と最低との比を求むれば次の如し。(大正七年の分は十一月迄の數字を採れり)
大正六年

一、東京物價指數

最低二六七・二二(二月)
最高二二三・八六(八月)

二、大阪物價指數

最低一七五・〇四(三月)
最高二二六・九六(十二月)

三、通貨月未流通現在高

最低六六三・二七二、一八三圓(二月)
最高一、〇五七、五九三、五一四圓(十二月)

四、日銀兌換券毎月平均發行高

最低四三三、六五四、二五〇圓(三月)
最高七〇四、二九五、四一六圓(十二月)

大體に於て變動の方向を同うし且つ幅も同様に大なりとす。

世人往々物價騰貴と通貨膨脹兌換券増發とが殆んど同一比を呈せるを見て物價騰貴の因を通貨膨脹特に兌換券増發に求め其間因果關係の顯著なるを説く者あり。然れどもそれは餘りに機械的に過ぎたり。繰返して云ふ、本來物價變動は其幅狭く(約二分)通貨總額兌換券は其變動の幅大なる

大正七年

一、東京物價指數

最低二二七・二七(二月)
最高二八五・五〇(十月)

二、大阪物價指數

最低二四六・〇七(二月)
最高三一六・五四(十月)

三、通貨月未流通現在高

最低九三七、四三四、三三三圓(四月)
最高一、二四三、七一一、〇二七圓(十一月)

四、日銀兌換券毎月平均發行高

最低六三三、五六〇、四五九圓(五月)
最高八五一、二二一、五七五圓(十一月)

(約二割)を常とす。本來變動の幅狭き物價(通貨兌換券のその十分の一)と本來幅廣かるべき通貨兌換券(物價のその十倍)とが殆んど同一比を以て増加膨脹せる事はやがて物價騰貴の勢が通貨膨脹兌換券の増發の勢よりも甚大なるを示せるにあらずや。もし其間因果關係を求むべくんば騰貴の度著しき物價に其因を求め膨脹の割合少き通貨、増發の度微々たる兌換券に果を求むべきにあらざるなきか。虚心坦懐の一讀書生は此結論に到達せざるを得ざるなり。

休戦後の通貨と物價との趨勢も余の議論を確むるものゝ如し。即ち大正七年十一月に入りては通貨月末流通現在高は一、二四三、七一一、〇二七圓にして前月の一、二二六、一三一、〇〇〇圓に比し一・四三%増、日銀兌換券毎月平均發行高は八五二、一二二、五七五圓にして十月の八三八、一八一、〇〇〇圓よりも一・五四%増なるに拘らず東京物價指數は十月の二八五より〇・七三%減にて二八三、となれり。通貨兌換券が休戦條約締結後尙ほ膨脹を續けつゝあるに反し物價が却つて下落せる此現象は通貨論者の説明し能はざる所なり。

三 結 論

余は先づ貨物それ自身を見、貨物側に物價騰貴の原因の豊富なるを明にしたり。次に通貨の側を調べたるに物價との單純なる直接關係非常に貧弱にして、もし因果の關係を求むべくんば物價の騰貴因にして通貨膨脹就中兌換券の増發は其果なりとの結論を得たり。即ち余は現時の物價騰貴の原因を戰爭に基く貨物側の變動に求め通貨兌換券を重視せずして問題を解決し得べしと信ず。